

■ 編集だより

編集後記

私が大学で研修をしている時に、所属する精神医学講座の教授がちょうど本学会総会の会長であったために、本学会に入会した。右も左もわからない状態であったので、入会させられたと言ってもいいぐらいである。確か虎ノ門パストラルが会場でお手伝いをさせていただいたことを記憶している。その当時は、学会事務局代行サービスが今よりも機能していなかったため、タイムキーパーから受付まで医局員総出で駆り出された。その頃精神科領域の医学雑誌は今ほど多くの種類はなく、その中でも本誌は、権威の象徴として輝いて見えた。一度でもいいから、この雑誌に名前が載ることを夢みていた医局員は少なくなかったのではないか。どこの出張先の病院でも必ず目につくところ置いてある本誌であるが、高嶺の花であり、手にとって見るのは、つい隣に置いてある商業誌になってしまう。あれから20年以上が過ぎ、非力ではあるが、本誌の編集のお手伝いをさせていただくようになった。今では、本学会に入会を勧めさせていただいたことに感謝している。

武田編集委員長のもと、学会のシンポジウムの発表を図や参考文献をいれ総説形式に体裁を整え、また、巻頭言、精神医学の潮流、精神医学のフロンティア、PCN だより、精神神経学雑誌百年、書評など新たなコーナー設けて、親しみやすい学会誌に少しでも近づくような工夫をしている。さらに、より読者の声を汲み取り、改良をどのようにしていけばいいのかのアドバイスを頂きたく5月号で精神神経学雑誌に対するアンケートをお願いした。6月の上旬の編集会議でその一部を目にする機会をえた。会員からの今までの改良に対して一定の評価とそれに対する励ましの言葉を頂いた。一方で、厳しいお言葉もあった。いずれもごもっともなご意見であり、これからの雑誌づくりの糧になる。

本学会の会員は、20歳代～90歳代までと幅広い年齢層であり、また、多岐に分化した専門領域の専門家から臨床全般広く担当されている精神科医と、読者の裾野は広い。その皆が興味を持てる雑誌づくりを目指していかなくてはならないが、理想ばかりを追求していくと、バランスにこだわりすぎて、平均的な薄っぺらな内容になってしまう。専門に偏りすぎた内容となると、関心があるのはごく一部の読者に限られてしまうのでよくないというご批判もいただく。本誌は100年以上の歴史があり、その重みを十分受け止め伝統を守りながらも、時代から取り残されないよう、時流にあった改革を着実に押し進んでいかなくてはならない。

5号の編集後記で富田先生が、本誌の役割の1つとして、「各専門家の情報交換の場」を挙げていた。その情報を持ち寄っていただくのは、会員の皆様であり、皆様のご協力があってこそこの本誌であることを忘れないでいただきたい。これからも、活発なご意見をお寄せいただき、もっと身近な存在になれることを目指していきたい。

忽滑谷和孝